

ABEMA Prime 中の“公平性”と“多様性”

守谷 颯太

本論を取り上げた理由は、以前からメディアに興味があったことから大学 2 年次の個人研究で ABEMA Prime を題材にしたことから始まる。ABEMA Prime（以下 アベプラ）のプロデューサーである郭晃彰氏に直接お話を伺い、番組の根幹に何があるのかを知ったことで、それまで以上にアベプラに興味を持つこととなった。今の情報メディアに何が必要なのか、何が足りていないのかを考えるきっかけになったと同時に、自身が情報を受け取る際の考え方や向き合い方が大きく変わった瞬間であった。

3 年次の研究で数的データを用いて番組の公平性を考察したが、郭氏が求めている「多様性」を見出すには至らなかった。そこでアプローチの方法を変え、本論では「議論の在り方」に着目しながらアベプラで起こる議論を考察している。

そもそもアベプラはどんな議論を目指しているのか。郭氏は「街中で世の中のことや時事問題について喋っている感覚の延長で**お喋り**する」スタイルを理想としている。どんな人でも世の中のことについて喋っても良い番組にすべく、あえて「議論」ではなく「おしゃべり」という表現を用いていた。これの実現のためにキャスティングにも明確な意図があった。

アベプラには 70 名のレギュラーがおり、タレントやお笑い芸人、インフルエンサー、学者など多種多様な人物が出演している。若者ならではの視点や 6,70 代による厚みのある意見が展開されることで「多様さ」を実現していた。また、おしゃべりの議題や企画なども制作陣に加えこのレギュラーメンバーが推薦することもあると分かった。

続いて、番組内でおしゃべりを展開する上で欠かせない司会者に着目した。様々な意見を持つ出演者やゲストの当事者が言葉を交わす中でどうしても白熱する場面は生まれる。司会進行を務める平石直之氏はそういった際に話の舵取りを行いながら、時には少数派の意見を援護することで多数決的な意見の言いにくさを軽減したり、異なる視点での問題提起をするなどしていることが本人のインタビューから伺えた。

ここまで番組の根幹となる「おしゃべり」と「多様性」について考察を深めたが、一つの課題があるように感じられた。それは、これらの番組側の意図が視聴者に伝わりきっていない点である。番組のアーカイブを公開している YouTube のコメント欄や SNS ではキャスティングに対する批判や司会者の発言を汲み取れていないと考えられる投稿が目につく。平石氏自身も、少数派側に立って意見したことで司会者が出しゃばっているように捉えられることがあるという。番組の意図が明確にあるのであれば、むしろ「メディアの在り方」「議論の在り方」といった根本をあえて議題にすることでアベプラの背景に何があるのかをはっきりさせる放送回があっても良いのではないかと考える。むしろ「そういう意図がある」ということを視聴者に前提づけることで番組内のおしゃべり以外に気を取られず、よりフラットに視聴できるのではないだろうか。

近年ではメディアの在り方が大きく問われている。地上波メディアのみならずインターネットも例外ではない。メディアへの不信感からネットでも情報が今まで以上に錯綜し混乱を引き起こす世の中となってきたように感じられる。情報リテラシーなどによく言われてはいるものの、その判断基準さえも曖昧で間違いやすい。そもそも間違いかどうか分からない。間違いと分かった頃には後戻りできない場所まできていることも往々にしてある。

今一度、自分自身の情報との向き合い方は適切なのかを一人一人が考え直すべきであると同時に、アベプラのような情報の取捨選択が視聴者主体であるメディアから情報リテラシーを養っていきたいと考える。